

## 本の紹介

藤岡換太郎著「天変地異の地球学：巨大地震，異常気象から大量絶滅まで」

講談社ブルーバックス，240p，2022年8月18日発行  
1,000円（税別），ISBN978-4-06-529098-9

著者はこの10年ほどの間に1～2年に1冊のペースで地学系のブルーバックス本を出版し，国民への地学の啓蒙普及に大きく貢献している。その著者がまたブルーバックス本を出版した。今度は「天変地異」がキーワード。著者から届いた書評依頼メールに「内容的にはかなり異論があるかと思いますが」と書かれていたのでどうしようかと迷ったが，異論が出るような本はおもしろいだろうと思い受諾した。そして読んでみて私は次の結論に至った。一般の皆さんはぜひ本書を読み，地球で起こってきたさまざまなスケールの地学現象について思いを馳せてみましょう！地学に精通する方もぜひ本書を読み，怪しいと思われる点は自分で調べながら自分の知識の整理に役立てましょう！

本書の最も重要なキーワードである天変地異は地学の学術用語ではない。天変地異は一般には「天変と地異，天空に起こる変動と地上に起こる変異，天地の間に起こる自然の異変」（日本国語大辞典）という，科学的には定義があまり具体的でない言葉である。しかし，斉一説に対する激変説（catastrophism）のことを天変地異説ということもあるので，本書のタイトルを見て私は小惑星衝突に代表される地球環境激変事件を中心に扱う内容かと予想した。しかし，読み始めてすぐにこの予想は裏切られた。本書は天変地異をより広く，さまざまな時間空間スケールで起こる地学現象ととらえている。著者も序章で「天災とは…（中略）その原因をなす天文・気象現象（天変）や地学現象（地異）などの地球科学的な現象が天変地異であると定義…（中略）本書ではこの前提で話を進めていく」と断っている。本書は天変地異をこのように定義しているので，小惑星衝突はもちろんのこと，地震や火山噴火，カンブリア生物大爆発や海洋無酸素事変なども天変地異として扱われる。こうなると高校理科「地学」教科書に記述されているほとんどすべての地学現象が天変地異になるので，本書は地学を丸ごと扱った総合的な啓蒙普及書

といえる。

本書は私たちの身のまわりで日常的に発生する自然現象から，人類がこれまで経験してきたやや大きな事件，新生代の注目すべき事件，中生代と古生代の主な事件，数億年サイクルの超大陸形成…というように，時間空間スケールが比較的小さなものからより大きなものに向かって進むように構成されている。そのため，本書の終盤には著者の表現を借りれば「空想地球科学的」といえる壮大な話が展開される。その中には著者独自のアイデアもいくつか含まれている。ネタバレになるのでここでは具体的に書かないが，読者の中には賛同（感動？）する人もいるだろうし首を捻る人もいるだろう。本書は事実とアイデアの違いがわかるように記述されているため，一定以上の科学リテラシーを持つ読者であれば混乱することはないと思われる。

それにしても著者の知識量と想像力には脱帽である。地球科学研究者として世界の海洋地質を長年調査してきた経験とそこで獲得された知識に加え，きつと普段から各方面にアンテナを向けて最新の地球科学研究に触れているのであろう。そうでなければこうした地学の総合的な啓蒙普及書は書けない。ブルームテクトニクス，プレートテクトニクス，スノーボールアース，ウィルソンサイクル，ミランコビッチサイクル，モンスーン，エルニーニョとラニーニャ…など，現代地学の重要キーワードはほぼすべて登場する。初版第1刷ということで，自然現象（地震など）とそれによる災害（震災など）が混同して表現されていたり，地層「塁重」の法則などの誤記（正しくは，累重）があつたりするなどの問題も散見されるが，重版の際に改善していただければと思う。また，「1959年の伊勢湾台風」という人工衛星画像も示されているが，当時は人工衛星画像がなかったはずなので何かの間違いと思われる，こうした問題も今後修正していただければと思う。

ぜひ多くの人に読んでいただきたい本である。

（愛知教育大学 星 博幸）

2022.9.3 受付

2022.9.26 学会ニュースレター公開

2022.9.24 学会ホームページ公開